

か？」なども収録されている。

ウラルの核惨事とは、57年9月に旧ソ連ウラル地方南部のクイシュトウイム近くの秘密原子力コンビナートで発生した核廃棄物貯蔵所での爆発事故のことである。世界で起きた原子力施設での事故の深刻度を表す国際原子力事象評価尺度(INES)によれば、最悪の「レベル7(深刻な事故—放射性物質の重大な外部放出)」とされているのはチェルノブイリ事故および福島事故であるが、ウラルの核惨事は、それらに次ぐ「レベル6(大事故—放射性物質のかなりの外部放出)」だとみなされている。

これだけの大事故であるにもかかわらず、ウラルの核惨事は、長い間隠蔽され続けた。旧ソ連の抑圧的な体制は、惨事の実を公開して被害を最小化することより、惨事を隠し

通して体制の継続を図ることを優先させた。ウラルの核惨事存在をソ連政府が公式に国際原子力機関(IAEA)へ通告したのは、チェルノブイリ事故が起き、グラスノスチ(情報公開)が進んだ89年のことだった。惨事から32年、ジョレスの英語版刊行から10年の歳月がたっていた。

ここで重大な点は、ソ連政府のみならず、英米仏の政府機関・原子力専門家などが、当初、ジョレスの告発を強い調子で否定し続けたことである。国際的な「原子力ムラ」もまた、ウラルの核惨事の隠蔽に事実上加担したことになる。

本書は、ソ連の抑圧的な体制と国際的な「原子力ムラ」とに対して、果敢に挑戦した告発の書である。同時に限られた資料を綿密に読み解いて、人体や環境への被害を明らかにした科学の書でもある。

『ジョレス・メドヴェージェフ、ロイ・メドヴェージェフ選集第二巻 ウラルの核惨事』

著者 ジョレス・メドヴェージェフ (ロシアの生物科学研究者)
佐々木洋解題・監修、名越陽子訳

現代思潮新社
3600円

2

旧ソ連のスターリン体制を批判したことで知られる反体制「異論派」のジョレスとロイの双子のメドヴェージェフ兄弟。1973年にソ連の市民権を剥奪された兄のジョレスは、ソ連の検閲済み資料やその他の公開資料を渉猟してロシア語の原稿を書き上げ、79年に英語で『Nuclear Disaster in the Urals』として刊行した。

同書を底本にした邦訳書はすでに

国際的な「原子カムラ」に 果敢に挑戦した告発の書

評者 橋川武郎 (東京理科大学大学院教授)

Жорес Медведев 1925年生まれ。69年に「ルイセンコ学説の興亡」を米国で出版し、放射線医学研究所分子生物学研究室長を解任された。73年英国出張中にソ連国籍を剥奪されたが、90年回復。



刊行されているが、本書は、ロシア語のテキストそのものを底本としている点に特徴がある。また本書には、86年のチェルノブイリ原発事故を踏まえ、改めてウラルの核惨事を振り返った「悲劇の前と後」「ヨウ素」の惨事「世界のエネルギー経済におけるチェルノブイリの要因」、そして2011年の福島第1原発事故を受けて書いた「クイシシュトウイム—チェルノブイリー—フクシマ」次はどこ

書評欄の書籍の価格は本体価格です。
2017.10.24